



羅針盤

2015年度 第15号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

Geistesaristokrat

2016 (平成28) 年1月8日発行

3年生は、センター試験が目前に迫ってきた。実力を発揮するためには「緊張+リラックス=いつも通り」(前号)が大切である。忘れちゃいけない魔法の言葉である。

3年生の教室に「受験生である前に豊多摩生であれ」という掲示物がある。「1. 毎日学校に来ること」と「2. 授業に出席すること」という2項目にわけ、趣旨を説明している。担任の先生方の願いがにじみ出ている。他者のために出席を求めているわけではない。何度も卒業生を出している教師は、どういう生徒が好結果を出したか記憶している。経験則だから、数学や物理の法則とは違う。が、あんなふうに走り抜けてほしい、と願っている。それが、あの貼り紙である。

君たちの力は、着実にたんとと勉強をすれば、後期試験の朝まで伸びつづける。そのコツが「いつも通り」であり、上記の掲示である。学校に行けば、友だちがいて先生がいる。心の糧になる。座標軸になる。平常心を取り戻せる。いつもと違う生活は、ルーティンを破ることになる。自分を見失うことにつながる。緊張感に押しつぶされ、叫びたい時の処方箋は、「いつも通り」に復帰することである。

◆センター試験の注意事項◆

筆記具： H、F、HBの黒鉛筆。和歌や格言の書いてある鉛筆は使用許可されない。シャープペンは、メモや計算の目的で使用できるが、マークには用いない。メーカー名などは可。キャップは可。よく消える消しゴムと鉛筆削り(電動不可)を用意する。赤ペンは、机の上に置いてはいけない。

服装： 体温調節のしやすい服装を選ぶ。

アルファベットや漢字、地図がプリントされている服(例「TOYOTAMA」「OXFORD UNIVERSITY」)は不可。

受験票： 合格手続きにも必要。捨ててはいけない。クリアフォルダー等に入れて持ち歩く。

写真票： 当日めがねをかける場合は、めがねをかけた写真を貼る。スピード写真も可。

試験会場： 学友によって会場が異なる。東京外語大、成蹊大、東京女子大、東京農工大小金井キャンパス、亜細亜大。下見をして、交通経路や駅からの道順を確認しておく。

◆センター受験上の注意点◆

数学 ●例年、「数学Ⅰ」と「数学Ⅰ・数学A」、あるいは「数学Ⅱ」と「数学Ⅱ・数学B」も、同じ冊子にあり、「数学Ⅰ・数学A」「数学Ⅱ・数学B」は後半にある。

毎年、数人の生徒が、間違えて前半の「数学Ⅰ」や「数学Ⅱ」を解いている。気をつけよ。

●解答用紙に「数学Ⅰ」「数学Ⅰ・数学A」「数学Ⅱ」「数学Ⅱ・数学B」の解答した方の科目をマークする欄がある。このマークを忘れると0点。

●「数学Ⅰ・数学A」「数学Ⅱ・数学B」は選択問題。選択した番号にマークしないと0点。

●センター対策の問題を演習するときは、普段からHBの鉛筆を使って解くようにする。シャープペンシルを使い慣れていると、結構違和感がある。

●図形や関数のグラフは、定規を使わずに書く練習をしておくこと。試験のとき、定規は使用できない。

その他 ●理科・社会で、2科目受験する者は、得意な科目を第1解答科目にすること。

●物理・化学・生物・地学にも、一部選択問題がある。

●自己採点のため、問題冊子にも自分の解答を記入しておくこと。

●自己採点は全科目が終わってから。それまでは結果を振り返らず、残る科目に集中する。

『受験上の注意』(12月配布)をよく読むこと。

明日、世界が滅びるとしても…

五郎丸 歩の「結果は自分には関係ない」や羽生結弦の「1つ1つの技に集中」という考え方を援用すれば、私たちが入試や試合で実力を発揮するためには、結果に執着しないことが大切で、そのほうが逆に結果に結びつくことになる。が、いずれもプロフェッショナルのことば。「私にはどうも…」と感じても不思議ではない。

作家の開高 健は、色紙を頼まれると、「明日、世界が滅びるとしても、今日、あなたはリンゴの木を植える」と書いたという。座右の銘といってよいだろう。本説は、コンスタンチン・ビルゲル・ゲオルギウ『第二のチャンス』(谷 長 茂訳、筑摩書房、1953、360~1頁)、登場人物としてのマルチン・ルターのことばである。「どんな時でも人間のなさねばならないことは、たとえ世界の終末が明日であっても、自分は今日リンゴの木を植える……」。1度聞いただけで心に残る。君にとっても、そうではないか。

アップル社のスティーブ・ジョブズは、17歳の時「毎日を人生最後の日だと思って生きれば、いつか必ずひとかどの人物になれる」ということばと出会い、それ以来、毎朝「もし今日が人生最後の日だとしたら、私は今日これからやろうとしていることを本当にやるか」と自問したという。スタンフォード大学で行ったスピーチ(2005年6月)である。ジョブズはさらに「いつか死ぬ日は訪れると記憶にとどめておけば、人生で重要な選択をする際に大きな助けになる。周りの期待、自分のプライド、失敗や恥をかくことへの恐れなど、そんなものはすべて死の前では意味を成さなくなり、真に重要なことだけが見えてくるからだ」とつづけた(「Newsweek」(日本語版)2011年10月19日号66頁)。

私たちは、明日世界が滅び、今日が人生最後の日だとしても、実は、快楽に身を投げ出したり、まして怠惰に思考停止したりはしない。たとえば、絵筆を持って描きつづけてきたキャンバスに向かうし、1週間後に予定されている試合の準備をするのである。もちろん、外的環境がそれを許さないかもしれないけれど…。

1歩踏み出すことに意味があるからだと思われる。機に臨む精神としては、成果や結果がすべてではない。精神科医で、多くの著作を残した小林司が「自己実現」を次のように定義している。

「自己実現」ということばを、「なりたい職業に就職できた」という意味にとって「小さい頃から自分はスチュワーデスになりたいと思っていて、大学を出てスチュワーデスになった。これで自己実現をした」というふうに、ジャーナリズムでは誤って使うことが多い。しかし、本当の意味はそうではない。「自己実現」というのは、「自分自身になる過程」であり、「その人独自の心理学的特徴や自分の可能性を十分に伸ばす過程」である。これは、ドングリにたとえるとわかり易い。ドングリを土に埋めると芽が出て、育って大木になるのは、ドングリの中に、もともとカシの大木になるという素質、運命が含まれているから、太陽の光、水などのいろいろなものに恵まれると大木に育つのである。それは、いわばドングリの自己実現であり、その可能性を含んでいたものを伸ばすことができたのだ。

すべての生物体は、一生涯を通じて、ただ一つの欲求を持っている。それは自分自身の潜在力を実現したいという欲求である。ドングリはカシの木になり、小犬は成長して猛犬になり、人間も同様に一人前の人間になりたいという欲求である。しかし、自己の本性を実現するという人間の仕事は、ドングリや犬よりもはるかに難しい。

人間というのは個人個人が全部異なった可能性を含んでおり、その各自の可能性をのばす過程を自己実現と呼ぶのだ。

人間はたえず育っていくものである。「育つ」というと二〇歳ぐらいまでの身体の発育を連想する人が多いし、それから先は退化の一途だと勘違いされているが、それは体だけのことであって、人間の精神は死ぬまで育ち続けるのである。人間の心は育っていく能力を秘めているのだ。死ぬまで伸び続ける自分の素質、可能性を十分に開花させる過程が自己実現なのである。

小林司『「生きがい」とは何か——自己実現へのみち——』(NHKブックス、1989)107~108頁

思いつきだけで書かれた文章でないことがわかる。「自己実現」は、成果や結果ではなく、「過程」であるという。そうであるとすれば、1歩を踏み出すこと、それが自己実現なのである。合否の結果は関係ない。君はリンゴの木を植えるのである。慰めではない。